

コペンハーゲン大学での研究生活

Biotech Research & Innovation Centre
University of Copenhagen

南波 宏枝
(千葉大学大学院医学研究院分子腫瘍学)

留学先であるデンマーク コペンハーゲン大学 Kristian Helin 研究室は癌エピゲノムの研究を進めていますが、大きく分けて、血液癌、脳腫瘍、ES 細胞を使ったより基礎的な研究の3つのプロジェクトに分かれています。自分のテーマを決めるため、初日からメンバー1人1人とのディスカッションが続き、その結果私は血液癌のグループに所属し、リンパ腫阻害剤の研究を開始しました。

ところが留学開始2ヶ月後に Helin 教授が Memorial Sloan Kettering Cancer Center, Center for Epigenetics の Director に着任され、コペンハーゲンとの掛け持ちでニューヨークに赴任されることになりました。その後少しずつニューヨークに異動するメンバーも現れ、教授は毎月ニューヨークとコペンハーゲンを移動する中で、ミーティングの仕方、研究ノートの共有方法、連絡方法など、“Transatlantic lab” の運営を試行錯誤しながら進める時期でもありました。

研究室には10ヶ国以上から30人程のメンバーが集まり、幅広い多様性が存在する中で、「皆の考えていることを知ることがとても重要だから、ヒエラルキーは存在しない」と一番初めに教授から伝えられました。実際研究所内の誰もがフレンドリーに敬意を持って交流しており、自由にのびのび研究に邁進することができました。コペンハーゲンに来て10ヶ月が経ちましたが、効率や労力を大切に考えること、真剣になりすぎないメリット、自由度の高さ、それぞれが自立し互いに貢献しようとする事、英語力はそこまで気にされないこと、ディスカッションが重要視されること、公私のバランス等初めはカルチャーショックを受けることもありました。毎週担当者が焼いたケーキを楽しむ時間などもあり、メンバー同士のコミュニケーションの場が多く用意されていました。海外で研究することにより日本の強みを認識すると共に、他国の良い文化を吸収できる、海外留学は素晴らしいチャンスだと思います。ヨーロッパの方々に比べ英語面でのハンデがあったり、文化の違いにお互い戸惑うこともありますが、ワードファイルでのブレインストーミングやメールでのやりとりを加えることで、より理解を深めたり、より良いサイエンスへと導いてくださる教授やメンバーに心から感謝致します。尊敬するメンバーの集まるコペンハーゲンを離れるのは名残惜しい

ですが、私も2019年5月から Memorial Sloan Kettering Cancer Center に異動し、また
雰囲気の違い新しい研究環境のもと引き続き精一杯努力したいと思います。

最後になりましたが、幅広く留学のチャンスを与えてくださる上原記念生命科学財団をは
じめ、選考委員の諸先生方に心から御礼申し上げます。また、留学先研究室として受け入れ
てくださったコペンハーゲン大学 Kristian Helin 教授、本留学の実現にあたり終始ご指導
賜りました千葉大学金田篤志教授、東京大学岩間厚志教授、島根大学宮城聡准教授に厚く御
礼申し上げます。

(2019. 4. 23受領)